

## 編集後記

『名古屋アメリカ文学・文化』第5号をお届けします。今号には、論文2編を掲載しました。掲載論文の数は多くありませんが、ともかくこうした形で研究成果を公開していくことには意義があると考えます。掲載論文に対し、建設的なご批評をいただければ幸甚に存じます。

本誌は「名古屋アメリカ文学・文化研究会」の機関誌として位置づけられるものです。当研究会は名古屋大学国際言語文化研究科を母体とするもので、博士号取得を目指す大学院生や満期退学者に、また、すでに大学等で研究・教育に従事している研究者に、研究成果発表の場を提供し、論文の執筆や、研究内容のさらなる深化を促すことを目的として発足しました。

研究会の活動としては、本誌の発行に加え、院生による読書会（「名古屋アメリカ文学読書会」）の開催、国際シンポジウムや講演会の開催などがあります。2016年度開催の国際シンポジウム・講演会をご紹介します。2016年7月22日に、Sydney University の Mark Byron 氏による講演会 “*Worstward Ho: Samuel Beckett’s Epic of Language*” を開催しました。バイロン氏は以前にも名古屋大学で講演してくださいましたが、その時に取り上げられたのは Ezra Pound でした。今回は、アメリカ文学の作家ではないものの、パウンドと同じくコスモポリタンであり、複数言語で作品を執筆したベケットについてのご講演となりました。難解ながらも興味深いベケットの後期作品を論じる刺激的な講演で、Q&Aの際には、参加者との間で様々な意見が交わされました。

また、本後記執筆後の開催になりますが、2017年3月11日、12日には、国際シンポジウム “*‘Walls’ and Anglo-American Literature and Culture*” が開催されます。この催しは2016年3月に開催した国際シンポジウム “*‘Mobility’ and North American Literature/Culture*” に引き続き、「中京大学ポストコロニアル・ツーリズム研究会」との共同主催により行われるものです。（名古屋大学国際言語文化研究科からはプロジェクト経費の助成を受けています。）基調講演者として、日本大学の Myles Chilton 氏をお招きし、また16件の研究報告が行われます。シンポジウムのタイトルは、2016年のアメリカ大統領選以来話題になっている、米墨国境に壁を建設するという宣言を思わせるものですが、もちろん、英米文学における「壁」というトピックは、多岐にわたる観点から論じ

ることのできるものです。実際、基調講演、報告のいずれも、「壁」をテーマに、英米文学・文化の様々な作品や関連トピックを論じるものとなっており、報告者の視点も様々です。

さて、2017年4月には名古屋大学の人文系の組織が再編され、本後記筆者の所属も国際言語文化研究科から人文学研究科に移ります。今後、本誌の発行を継続することができるのか、できるとしたらどのような形でなのか、まだ不透明なところがありますが、人文学研究科においても、可能な限り、本誌の発行を継続し、それぞれの大学院に所属する大学院生や若手研究者の研究発表の場を維持していきたいと思えます。

これまでの号同様、本誌掲載の論文もオンライン化する計画です。ファイルは「名古屋大学リポジトリ」に保存され、本研究会のウェブサイトからリンクがはられます (<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~nagahata/nu-alcs/>)。

(長畑 明利)